

陳舜臣さんを語る会通信

No.150 Jan. 2026

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

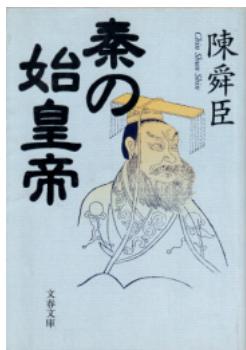
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2026年1月10日

初出はNHK学園通信講座「わたしの人間大学」受講テキスト『秦の始皇帝』

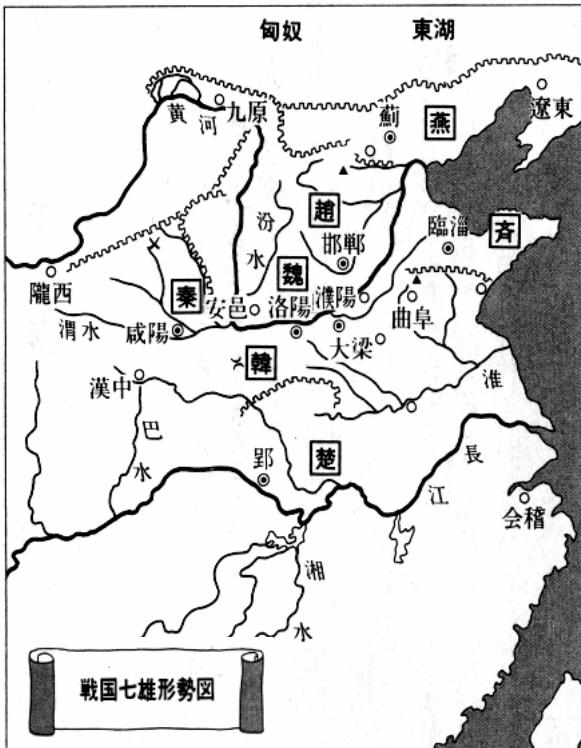
本号では『秦の始皇帝』をとりあげます。初出は、NHK学園通信講座「わたしの人間大学」受講テキストです。教育テレビで、1994年1月11日から3月29日まで毎週火曜日、12回放映されました。初刊は『秦の始皇帝』(1995 尚文社ジャパン)です。ここでは主として文春文庫版(2003)を使用しました。

章	章題	内容	■補足キーワード
まえがき		「始皇帝は中国というものの生みの親といってよいだろう」。その後の時代において「中国が一つであることは、まさにアприオリ(本来的であること)であった」「なにかを生み出そうとおもう者にとって、始皇帝は失敗したモデルである」「始皇帝のもつエネルギーは、彼の生きた時代から与えられたといえる」	
第一章	現代に生きる功績	秦は戦国の七雄の一つであった。前221年、天下を統一。はじめて皇帝を使い、文字を統一し(小篆しようん)、車輪の幅を統一し、『馳道』(ちどう 規格が統一された道路)を建設し、郡県制を採用し(秦が行っていた制度を全国に拡大 役人は中央から派遣 世襲なし)、度量衡および貨幣を統一した。「私は、こういうむりをしたから秦は滅びたというふうに考えております」	
第二章	(この章から時代をさかのぼり秦のはじまりからたどっています) 乱世の果て	秦のはじまり/「秦の伝説によると、遠い祖先が周王八代孝王に、おまえは牧畜がうまいからこの辺(いまいえは甘粛省東部)の土地をやろうといわれてもらった、それが秦のはじまりだというのです」。犬戎(けんじゅう)に討たれた周の幽王の子の十三代「平王の護衛隊長のようなことをしていたのが秦の先祖です。この護衛の功勞によって秦は諸侯に封じられたのです。(諸侯の中では)新参者です」。商鞅の政治改革/「秦の国力の充実にかかわったのはほとんどが外国人の人です。…。衛の人、商鞅(?-前338)は孝公に仕え、その信任を得てつぎつぎに政治改革を進めました。その政治方針は、厳罰をもって法律を守らせるごとでした」。その苛酷なやり方を憎む人も多く、「孝公が亡くなるとアツというまに彼は失脚」し、無残な最期をとげます。■鉄製農具の発達 合從策・連衡策、	



文春文庫版表紙

右の「戦国七雄形勢図」は文春文庫版より転載。NHK学園通信講座テキストから転載した画像は、その都度その旨、記載。特にコメントのないものは編集委員撮影。



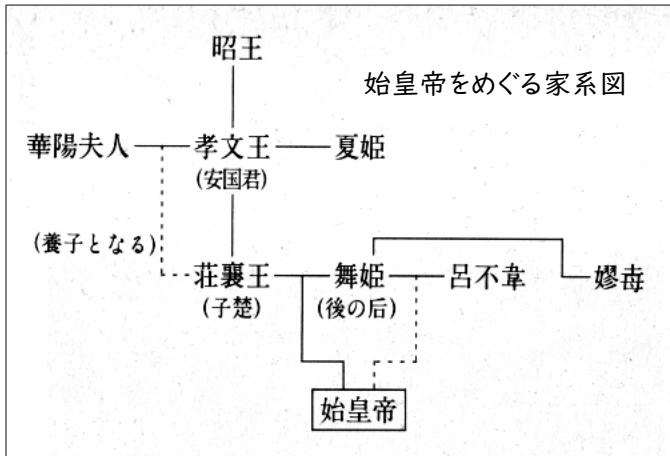
NHK学園通信講座
「わたしの人間大学」
受講テキスト
古本屋で見つける¥785

『秦の始皇帝』(2)

章	章題	内 容	■補足キーワード
第三章	少年王政の秘密	人質の子 / 「始皇帝が生まれたのは(戦国の七雄の一つ)、趙の国都邯鄲(かんたん)です。彼の父親の子楚(しそのちの莊襄王)が人質として趙に連れていかれていたからです」。商人・呂不韋の投資 / ここに呂不韋(りよふい ? - 前235)という商人が登場します。彼は、「掘り出し物かもしれない」と不遇な子楚に目をつけ、「私は、あなたの門戸をにぎやかにさせてあげたい」と近づき、二人の間に話が成立します。呂不韋は秦本国にも乗り込み、資金力で念入りに下工作を行います。始皇帝出生の秘密 / そんな時、「子楚が呂不韋の愛妾を見初め、譲ってくれ」という想定外の事態が生じます。「そして、子楚の妻となった彼女は男の子を産み、その子は政(せい)と名づけられました」。『史記』「呂不韋伝」によると、呂不韋の愛妾は子楚の妻となる前にすでに身ごもっていたということです。でも、陳舜臣さんは、「私は、それはありえないことだとおもいます」とおっしゃっています。さて、真実は?	
第四章	全国への道	始皇帝の天下統一 / 「じつは、天下のほうでも統一を望んでいた。望んでいただけでなく、その動きもあったのです」。力をつけてきた商人/国境を越える人の動き	
第五章	独裁者・光と影	始皇帝とアクバル大帝 / 始皇帝とインドのムガル王朝のアクバル大帝には、13歳で即位したこと、即位に貢献した人物を死に追いやったことなど、よく似たところがあります。「天下統一というような大事業は、普通の神経の持ち主にはできないことかもしれません。人のできないことを平然とやってのける人にしてはじめてできることでしょう。これを、私は『魔性』というのですが、始皇帝は、この『魔性』をもった人といえるとおもいます」。魔性の人 / 『史記』によると、尉繚(うつりょう)という人物のことばとして、「秦王(始皇帝)は…。約(窮すること)に居れば、易(たやす)く人の下に出て、志を得れば亦(ま)た人を軽食(軽蔑し食い散らす)せん」と記述しています。 ■荊軻(けいか)	
第六章	万里騎馬長民城と	万里の長城 / 「万里の長城は始皇帝がつくったのだとおもいがちですが、じつはそうではなく、戦国時代、各国がそれぞれ城壁を築いていたのです。それは、自国の領土の範囲を明確にするためと、軍事的な防御という意味がありました」。匈奴の脅威に備える長城/英傑なリーダー・冒頓单于(ぼくとつぜんう)/將軍蒙恬の伝説 / 「匈奴(きょうど)をオルドス(黄河が逆U字型に湾曲したところの南)から追い出すために派遣されたのが蒙恬(もうてん)という将軍です」 ■「孟姜女(もうきょうじょ)」の伝説	



荊軻が秦王を刺そうとする場面(山東武氏祠画像石)
NHK学園通信講座テキスト第5回から転載



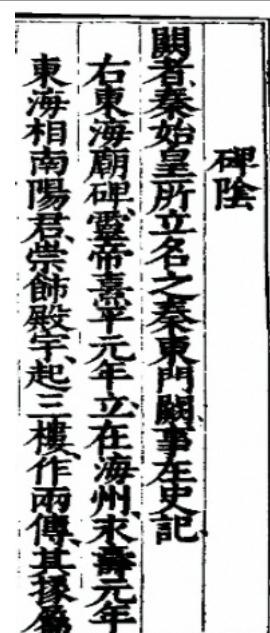
上の家系図はNHK学園通信講座テキスト第3回から転載
『史記』「呂不韋伝」の故事、『奇貨居くべし』のとおり、呂不韋は子楚を奇貨(掘り出し物)と見、投資をしたのです。安国君の寵愛を受ける華陽夫人には子がいなかったので、呂不韋は華陽夫人を説き、子楚を売り込み、その養子とすることに成功します。

『秦の始皇帝』(3)

章	章題	内容	■補足キーワード
第七章	秦を支えた法家	性善説と性悪説/春秋・戦国時代、後世にもっとも影響を残したのは孔子の儒教です。ところで、儒教は「孔孟の教え」といわれるよう、孟子は儒教本流にあって、重要な人物です。同じく儒教の人、荀子は、孟子の「性善説」に対し、荀子の「性悪説」として知られています。その荀子の門下から出た李斯や韓非たち(法家)が秦の国をつくることになります。秦の国づくりに生きる『韓非子』/『韓非子』というは秦の政治のバイブルのようになっています。1530年ころにイタリアのマキアベリが書いた説(『君主論』)とほぼ同じです。君主は、権力を集中しなければならない、冷酷でなければならない、私情をまじえてはならない、と説いています。■焚書坑儒 徐福(じよふく)	
第八章	神仙へこのがれ	天地を祀る『封禪』の儀式/封禪(ほうぜん)の式とは、聖天子が泰山(たいざん)で天地を祀(まつ)るという儀式です。「五百数十年ものあいだやっていない」、したがって、式のやり方がわからなくなっていた封禪の式を、儒者たちに聞いても、みな言うことが違うので、始皇帝は自分の思い通りのやり方で行いました。不老不死の願い—徐福の伝説/「神仙を信じ、自身が神仙になりたいと望んだ始皇帝です」。そんな始皇帝の願いにつけ込んだのが徐福です。「童男童女を数千人と莫大な旅費をせしめたのです」。この話は『史記』の中、複数か所、出てきます。	
第九章	逆(ほとばし)る庶民の恨み	「始皇帝が行った大工事といえば、だれでも万里の長城をおもい浮かべることとおもいますが、…。ここでは、水利工事と、宮殿・陵墓の造営についてみてみます」。不毛の土地が最高の沃野に—鄭国渠(きよ)/未完の巨大宮殿—阿房宮(あぼうきゅう)、「阿房宮の建設には七十万の囚徒が動員されました」。死後の住まい—驪山(りざん)陵、「職人を全員、内部の羨門(せんもん 墓道)を閉じるときに、閉じ込めてしまったのです。彼らは、真っ暗ななかで飢えて死ぬほかなかったのです」。ここであげた以外に兵馬俑坑があります。	



徐福村は、江蘇省連雲港市を中心から、北へ車で1時間ほどのところ、山東省との省境近くにある。左はロータリーに立つ徐福像。上の2枚はいずれも徐福祠。2005年撮影。聞くところによると、その後、徐福像は徐福村へ移設されたとか。

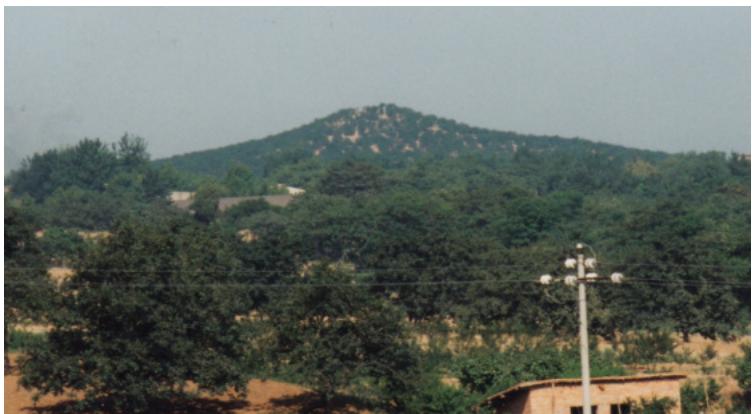


江蘇省連雲港市は歴史のある都市です。海州区には、『海州古城』と呼ばれる一角があります。秦の始皇帝は中国を統一すると、ここに、対外開放の門戸として『秦東門』を置きました。この秦東門の遺跡のほか、古い街並みが残っています。左の写真は2007年撮影。

江蘇省連雲港市にある
徐福村と秦東門遺跡

『秦の始皇帝』(4)

章	章題	内 容	■補足キーワード
第十章	戦国の軍隊最強	軍事力を支えた経済力/「秦の天下統一は、いうまでもなく軍事力によったものです。その軍事力を生み支えたのは、やはり経済力ということになります。秦の経済力を生み出したもの、それは商鞅から李斯に至るまでの政策です。法家思想による現実的な政策、そして全体主義的な政治です。■王翦(おうせん)将軍の老猾さ	
第十一章	文語るは	偶然の大発見/兵馬俑坑の発見。陝西省臨潼県安寨人民公社西楊村の村民が井戸を掘っていて発見。兵馬俑坑は、忠実に再現した首都咸陽防衛隊。「不思議なことに兵馬俑坑についてはまったく(史書に)記述がありません」	
第十二章	帝国の滅亡	始皇帝の死/紀元前210年、末子の胡亥を連れて巡回中、河北省の沙丘で病没。始皇帝の長男扶蘇あての「咸陽に戻り、葬式を主宰せよ」という遺書を、同行の丞相李斯と宦官趙高が、扶蘇とその後見者蒙恬に死を命じる文言に改ざんします。さらに趙高は、共謀者李斯さえ殺してしまいます。司馬遷が憎んだ男—趙高/司馬遷には、「どんな人でも、その人のよいところを、どこか取り上げようという姿勢があります。…。そんなやさしい司馬遷でさえ、こいつだけは許せないと弾劾の筆をふるった人物が一人だけいます。それが宦官の趙高です」 ■陳勝・呉広の乱	
あとがき		「秦という国は、Chinaの語源でもあり、それを知ることは、中国の基本的なもののいくつかを、理解しやすくしてくれる」。『韓非子』を読んで感動した始皇帝のことば、「—ああ、私はこの著者と会って、交際できたなら、死んでもかまわない」「—自分はえらい。六国を滅ぼして、天下を取った。ふつうの人間ではないぞ。泰山で封禪の式をあげよう。それから不老不死の薬を手に入れよう」「二千数百年の歳月がたった今も、人間の伸縮自在の範囲は、そんなに変わっていないようである」。 ■始皇帝の失敗に学ばぬ項羽	



上は、始皇帝の死後の住まい——驪山陵遠景。タクシーを降り、道路わきから撮影。

左上は兵馬俑坑。秦始皇帝兵馬俑博物館内は撮影禁止なので残念ながら写真がない。しかたなく、NHK学園通信講座テキスト第9回より転載。

左下は項羽像(江蘇省徐州市の戯馬台)。NHK学園通信講座テキスト第12回に掲載されていたので探したら、同じ場所で撮った写真が私(櫻)のアルバムに見つかった。人物は、私が勤めていた大学の学生。

驪山陵、兵馬俑坑、戯馬台項羽像